

変わらないもの

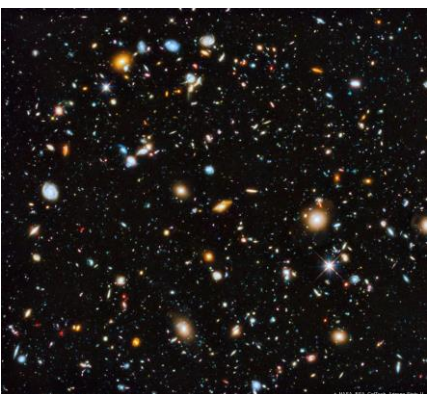
・・・私の星巡り・・・

榎本 潤

先日、ハッブル宇宙望遠鏡が捉えた天体の写真をスクリーンに投影して見ていたら、久し振りに童心に帰り宇宙空間に入り込み、自分が宇宙人であることを改めて実感できました。ナサが公開しているのは五〇枚程度の写真ですが、私が以前に描いていた宇宙のイメージを一変させるものでした。

特に、銀河団の重力をレンズ効果にして撮影した宇宙深部の写真は、果てしなく続く銀河の海を感じさせるもので、まさに永遠と言うにふさわしい世界だと思いました。(写真①参照)

写真① 超深部宇宙

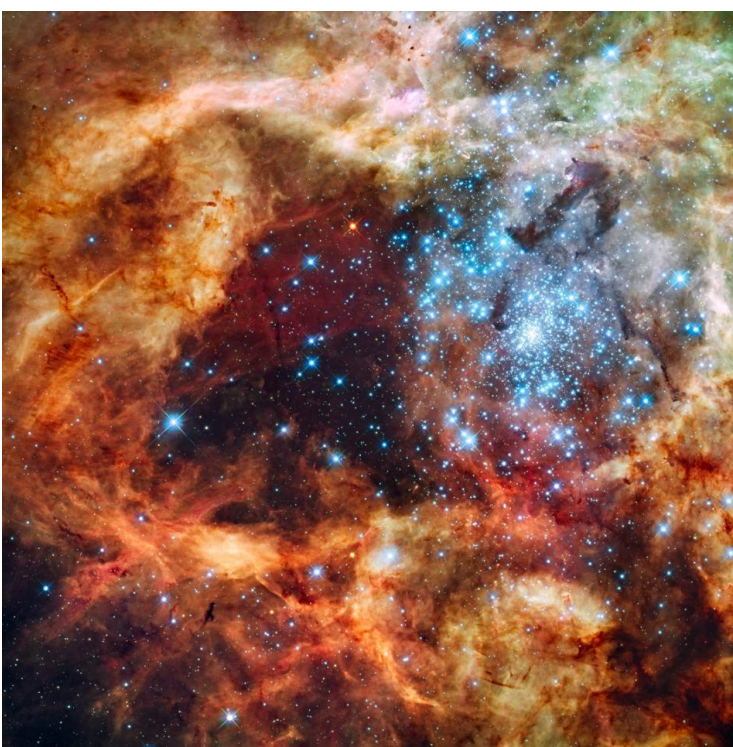


(銀河団のレンズ効果を利用して捉えた宇宙の超深部)

ゆらぎが創り出すもの

中でも強く印象に残ったのは、高エネルギーの星間ガスやプラズマのゆらぎからでしょうか、その空間から、次々と太陽のよ
うな恒星が誕生する姿でした。(写真②参照)

写真② 星間物質の渦の中より誕生する恒星



(タランチュラ星雲内部の空洞と、誕生したばかりの青い恒星)

また回転する中性子星やブラックホールの銀河中心付近から、および銀河の腕の中から新たに生まれた恒星を放出して、どうどうとした長い腕を持つ銀河に発展していく姿がありました。(写真③参照)

写真③ 渦巻状銀河



(銀河は、この宇宙に千億個以上あると言われていますが、その形や大きさは、それぞれ異なり、個性的です。それでも、形状の特徴から、楕円銀河、渦巻銀河、レンズ型銀河に分類する分類法もあります。)

高齢に伴う変化

そして太陽のような恒星の終末期とされる赤色巨星は、星の表面近くの水素の核融合反応が終結に近づき、星の中心付近に溜まったヘリウムの核融合が活発になる時期です。(写真④参照)

写真④ 赤色巨星



(この赤色巨星は、星内部で水素より重い元素の融合も進んでおり、数千年後には、白色矮星になると思われます。)

とりわけ、印象に残ったのは、この赤色巨星の膨張が、球面で広がるだけでなく、ドーナツ状にも膨張して、惑星軌道の一部を飲み込んでしまったと思われる写真でした。私たちの住んでいる太陽系では、まだ五〇憶年も先の事ですが、この太陽の膨張は、計算上では最大時で金星から地球の軌道あたりになるとの事でした。(写真⑤参照)

写真⑤ 赤色巨星2



(ふたご座、エスキモ―星雲)

この星の中心部では、ヘリウムか、それより重い元素の核融合反応が活発になっており、星表面の水素の反応は弱まり、ドーナツ状に膨張しているように見えます。太陽と同程度の質量の星ですの
で、太陽も同じような変化をする可能性もあると思います。

地球の寿命

もし、地球の破壊原因として圧倒的に発生確率の高い温暖化や核戦争を回避できたとして、また次に続く伝染病の蔓延、火山の連動する噴火、隕石との衝突、氷河期等を回避出来たとして、地球は遙か遠い未来で、しかし確実に、この膨張する太陽に飲み込まれるか、仮に太陽の外に残ったとしても、太陽に近過ぎる地球はカラカラになって太陽風に飛ばされてしまうかも知れません。

最善のシナリオ

でも、これは、最善のシナリオであると私は思いました。なぜなら、この地球の終末までには、約五〇憶年という時間があり、それまで人類は、地球を破壊しなかったというシナリオだからです。そして、神様がお創りになったものを、神様が終了させるという当然のシナリオだからです。

輪廻の宇宙観

この躍動する宇宙の中で、果して変わらないものなどあるのでしょうか。私は宇宙の写真を見ながらいつの間にか自問自答している自分を発見しました。その一方は「世の中に永遠に変わらないものはない。」というのが結論です。仏教的に表現すれば、諸行無常(しよぎようむじょう)。つまり、宇宙のすべてのものが移り変わるの

あり、輪廻（りんね）の思想も、命あるものから宇宙の塵まで、広い範囲に適応できる概念で、高齢化して赤色巨星が更に超高齢となり、内部での核反応が終わり矮星になっても、何時かはまた、輝かしい恒星に生まれ変わると考えます。魅力的な考えですが、まだ、全部の過程が明らかになったわけではありません。

宇宙の法則

もう一方は、「永遠に変わらないのは、宇宙の法則のみ」という結論です。これは理論物理的宇宙観と言ってもいいでしょうか。宇宙は一見、混沌としているように 見えるけれども、一つ一つを見れば、厳密に宇宙の法則に従ってうごいている、もし仮に、この宇宙から全ての物質がなくなっても、法則は残るだろう」と。尤もな見解だと思えます。そして、多くの現代人が受け入れ易い永遠かも知れません

法則は絶対か

一つの陽子と一つの電子からなる最も基本的な物質である水素の反物質である反水素は、一つの反陽子と一つの陽電子からできていますが、この両者（水素と反水素）が同じ波長の光を出すことが確認されたのが、昨年（二〇一六年）のことでした。この反水素に最も基本的な法則のひとつである万有引力の法則が適応出来るのかはまだ解っていません。つまり、私たち人類は、多くても半分以下の事しか解っていないのが現状で、絶対的な法則があるかないかを決めるには、まだ早過ぎると私は思います。

旧約聖書に観る永遠（マラキの言葉）

「エホバ（神）は変わらざるものなり」これは、旧約聖書の最後に編集されているマラキ書三章六節の言葉です。天地万物をお創りになり、それを御心のままに動かしている神。その神自身は変わらないものだと言いたいのでしょうか。そして、その作り方や動かし方について、法則を使うか使わないかを含めて当然、神自身がお決めになることとして理解されているのではないのでしょうか。

新約聖書に観る永遠（パウロの言葉）

「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。」（コリントの信徒への手紙一、一三章一三節）これはパウロがコリントの信徒あてに書いた手紙の一部です。永遠に存続するものとしてパウロが第一に挙げた信仰ですが、自分自身のことを思い出してみると、永久に変わらないどころか、いつも揺れ動いていて、何時消えてしまうかも知れないものという方が正直な実感です。

二番目の希望について、どんなに逆境の時でも希望を持ち続けることは、私の理想です。しかし、朝には希望を持って出かけて行っても、夕べに失望して帰る日も度々ありました。三番目の愛については、更に変わりやすいもの、失い易いものと言えるでしょう。

それでは何故、パウロは、このように、最も弱く、繊細で壊れ易いものを、永遠なるものとして選んだのでしょうか。今回、私に与えられた結論は次のようなものでした。それはパウロが、この信・望・愛を人間のそれではなく、神のそれを中心に据えてこの手紙を書いているからです。そして人間が平気で壊していくそれをも、神は黙々と修復し続けていて下さることにパウロは気付いていたから

ではないかと思ったのです。

こうして私は今回もまた、私の星巡りの旅を感謝を持って終え、投影機のスイッチを切ったのです。

補足

日常生活に帰還して数日、私は時々、今回の私の星めぐりと、その結論について思いめぐらしている自分を見出しています。

人間のそれと、神のそれ

私の主な疑問は、「信仰・希望・愛」はなぜ永遠か。そして、永遠なる神の「信仰・希望・愛」と、人の「信仰・希望・愛」と、この両者に関係はあるのか。あるとしたら、「永遠性はどう引き継がれるのか。」との疑問でした。

翻訳上の問題

この問題を複雑にしている原因の一つに、言葉の翻訳の問題があるとされます。日本語の「信仰・希望・愛」は、パウロが使っていたギリシャ語の、「ピステイス・エルピス・アガペー」の翻訳ですが、この両者も全く同じではありません。例えば信仰は信じ仰ぎ見ることで、人間が神様や仏様やキリスト様に対しては使えますが、その逆には使えません。ピステイスは、上下関係はない言葉ですので、日本語に翻訳する時には、その状況により、信仰、信頼、信実などと使い分ける事になります。私は「ピステイス・エルピス・アガペー」の訳として「信・望・愛」を推挙し

ます。これにより、イエスの神に対する信頼等も含んだ原語に近い意味の表現ができると思うからです。

愛の賛歌のモデル

この手紙の二二章一節から始まる愛の賛歌は、もちろんパウロがコリントの信徒へ、信徒としてあるべき理想を、最高の道として書き送ったものですが、その内容の殆どは、明らかに、イエス自身の生き方をモデルとして、イエス自身の愛の姿を記述したものととも言えると思います。そして、それと同時にパウロ自身が体験した多くの苦難と、その中にしみ出てくる神の愛の実感を記述したものとも言えると思います。ここでは、永遠者であるイエスの愛と、その愛を受けて輝くパウロの愛が調和して働いている姿の例だと私には見えるのです。

繋がっていること

それでは、私たち人間の信と望には、永遠との接点はあるのでしょうか。イエスは屢々、たとえ話でお話になりました。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしはぶどうの木、あなたがたは、その枝である。私に繋がっていない。わたしもあなたがたに繋がっている。人がわたしに繋がっており、わたしもその人に繋がっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」(ヨハネによる福音書一五章一〜五節)と。つまり、この『ぶどうの実が、永遠である』との理解が許されるならば、神とイエスの側ではすでに手を延ばして、永遠に繋がる道を示していると、イエスは言っておられるのではないのでしょうか。

復活と永遠

私が最も信頼している聖書の注解書の一つに、1978年発行の矢内原忠雄の聖書講義があります。その中で矢内原は、「信・望・愛」が永遠である根拠として、次のように記述しています。

信仰の本質は信頼である。我らは既に神に信頼している。況や復活の日、神の御顔を見る時、神に対する我らの信頼は一層充実するに違いない。この意味において、信仰は永遠に存続する。

希望についても同様、（復活の後の）永遠の生命は、地上の生命よりも一層新鮮であり、前進的である筈である。この意味において希望もまた、永遠に存続する。

愛はなぜ永遠に存続するか。愛は生命であり、而して生命は復活によりて永遠だからである。

まとめ

- ① 宇宙は永遠を感じさせる程、雄大であるが、有限かもしれない。
- ② 恒星は光り始めを誕生、光り終わりを死と呼ぶと、その間、燃料の量と種類で大きく変化します。
- ③ 太陽も約50億年後には、赤色巨星へと変化し、地球にも確実に終わりの時が来ます。
- ④ 輪廻の宇宙観は、理念としては解り易いですが、証明は困難です。

⑤ 理論物理的な宇宙の法則が、絶対的なものか、結論を出すにはまだ早すぎると思います。

⑥ 旧約聖書には、「神だけが永遠」とする思想があります。

⑦ 新約聖書中のパウロは、「信・望・愛」を永遠と考えました。

⑧ 補足

⑧ 「イエスのたとえ話からは、『人は永遠に繋がることによつて、永遠となり得る』とも読めるかも知れません。

⑧ 矢内原の注解から、『愛は生命（いのち）そのものである。生命は復活後により充実して、永遠性を持つ』と記しています。矢内原は、今は有限な生命であっても、復活を通して永遠性が与えられると言います。そして、復活後の生命こそ本物の生命であり、今の生命は仮の生命なのだと言います。（聖書講義 P395）

⑨ 結論（永遠に続くもの）

「聖書を通して見える永遠に続くものとは」それは「永遠の根源である三位一体の神と、その永遠性に繋がる「信・望・愛」、即ち復活せる人の命である」と言えると思います。